# 戦争と人間 16

## 裁かれる魂　第四部

五味川純平

戦争と人間 16

1975年10月31日 第1版第1刷発行

著 者 © 五味川純平
1975年
発行者 竹村一
印刷所 暁印刷株式会社
製本所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台2の9
電話 東京 (291) 3131～5番
振替 東京 9－84160番
郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします 三一新書 841

# 戦争と人間

18

**裁かれる魂**

第六部

五味川純平著

# 戦争と人間

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

# 裁かれる魂

## 第四部

# 1

兵舎の外は一面に解氷期の原野であった。いかにも冷たそうに濡れた褐色の地肌と残雪のゆるやかな起伏のほかは、何もない。湿原が興凱湖へつづいている。その辺の何処かに国境線が通っている。界標は、見渡す限り点在している野地坊主のどこかに立っているのかもしれないが、誰も見た者はない。

兵隊は、明けても暮れても、兵隊仲間の顔しか見られない。兵隊以外の生き物といえば、軍馬くらいのものである。寒い間は野鳥が飛ぶのもほとんど見かけない。せっかくの日曜祭日にも外出するところがない。人里は遙か後方の別世界である。

初年兵は、毎日、泥だらけになった編上靴の手入れに苦労していた。拭いたぐらいでは泥が落ちない。夕方になって、泥が少しでもついている編上靴を週番上等兵や古兵が発見したら、ビンタの嵐である。だから、氷がジャリジャリするような水で泥の部分を洗う。編上靴を水で洗ってはいけないことになっている。革が固くなるからである。雪どけどきには毎日のことだから、毎日水で洗っては乾く間がないし、濡れた革に保革油を塗っても効果はない。だが、洗う以外に綺麗にする方法がないから、束藁を水に浸して洗うのである。いけないことをしてでも、泥を落すという目的を達しさえすれば、週番上等兵も古兵も文句は言わない。革が固くなって編上靴の寿命が短くなっても、被服掛以外は知ったことではない。要するに、初年兵を休ませないために、無駄な仕事を

ふんだんにさせるように出来ている。それが軍隊である。

伍代俊介が衛兵下番をして来ると、初年兵たちが俊介に群がって装具を取り、巻脚絆を解き、編上靴を脱がせた。昔の下僕が主人に仕えるのとそっくりなその姿は、古兵への明らかなへつらいであって、俊介にはうとましい限りだが、これが避けられない内務の躾けなのである。仮りに俊介がそれをさせなければ、他の古兵から文句をつけられるのは初年兵たちである。伍代兵長がしないでよいと言ったからといって、衛兵下番の古兵の装具の手入れを初年兵がせずに放っておけるのか、と、俊介の意志とはかかわりなしに文句がつく。これも軍隊である。

俊介の編上靴を取ったのは渕上という召集初年兵であった。齢は俊介と同じくらいであろう。

「お疲れでありました」

確かに疲れていた。衛兵の二十四時間勤務は楽ではない。歩哨は各一時間の立哨、休憩、控えの繰り返しだが、歩哨掛は一時間ごとに歩哨の交代を規則通りにさせなければならない。夜間には衛舎掛と交代で休もうと思えば休めなくはないが、相性が悪いと、出来ることまでせずに済ませてしまう、損な性分である。その日の衛舎掛は俊介とは肌が合わなかった。『関特演』[注二]以来の古兵で、兵長を鼻にかけている。上には要領がよくて、下には気合のかかり過ぎた、横着な男である。俊介は、いつか、「たかが関特演ぐらいで、でかいツラをするな」と怒鳴りつけるときが来そうな予感がしているのである。相手がまた、伍代兵長は予備役だが、ノモンハンの生き残りだから、負け犬めと見下したくもあり、煙たくもあるらしいのだ。

その男、浜田兵長は初年兵たちに、

「ようと磨いといてちょうだいよ」

と、ふざけた言い方をしながら、俊介に流し目をくれて、俊介とは別の班に入っていった。
俊介は、
「いま手入れしても無駄だろう。乾かすからこっちに寄越せ」
と、渕上の手から編上靴を取り戻して、班内のペチカのそばに置いた。これは反則だが、雪どけ水が浸み込んでしまった靴は、そうでもしなければ乾かないのだ。古兵たちは屢々やることである。日夕点呼のときに処置しておけば、どうということはない。
俊介はそのまま入浴にも行かずに、寝台に横になった。衛兵下番者だけは曜日を問わずに入浴できるし、時間をかまわずに班内で就寝を許されているのである。
横になったが、神経が尖っていて、眠れなかった。
眼を閉じて、一人だけの小さな宇宙にこもろうとする。衛兵勤務のいいところは、こうやっている自由な時間が少しばかりあるということかもしれない。
何処かしら、遠くに、自由で、愉しくて、素晴らしい生活があったような気がする。それは、あり得たはずでも、ありはしなかったのだが。想念は立ちこめる霧のようである。そのなかから、まず邦が現われる。いつもそうである。遠くに立っている。こちらに熱い眸をそそいでいる。どうかすると、それが、胸もとからよじ登って来るような眸に変ることがある。別の女性の黒い、やさしい、深々とした眸だ。久滋温子、通州で非業の死を遂げた狩野温子が、まだ生きているかのようである。俊介は、長い年月、その眸に、幾度自分の行動を照らしてみたことか。あるときは誇示したり、あるときは恥じ入ったり。
俊介は二人の女からの一途な視線の先で、体をこわばらせて寝ていた。眼を閉じていても見えるのだから、避


此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

けようがなかった。心を掻きむしられるようである。「地方」にいてさえ男と女の自由と平和を築くことができなかったものが、軍隊に入ってしまってどうもがいても無駄なのである。せめて楽しげに暮らしてくれと希うほかはない。自分のことなど忘れてくれた方が気が楽である。どうせ帰れはしないのだ。いつかは戦場に投入されるのだ。「大戦」が関東軍だけを除外してくれるはずがない。ソ連軍と戦うのであれ、米軍と戦うのであれ、戦力差はノモンハンで骨身にしみている。戦闘の規模が数十倍に拡大されれば、死ぬ確率もほとんど間違いなく拡大される。どうせ死ぬのだ。女を恋うても詮ないことである。そうとわかっていて、女への涯しない憧れに身を焦がすとは。

俊介は痙攣が起きそうになるのをこらえていた。それを救うかのように、あるいはもっと責め苛むかのように、苦のしどけない裸像を心の複眼が映しだしてきた。しとどに濡らした跨間を隠そうともせずに、俊介を蕩然と見ている。淫猥な感じであるはずの情景が、少しも淫猥でなかった。男はみんなそこから戦場へ死の旅立ちをして来たからかもしれない。

俊介は苦の下腹部に邦のそこを想像した。そうすることに何の抵抗感もなかった。自分を不潔とも感じなかった。邦と苦のどちらに対しても不実とは思わなかった。もう会うことはおそらくないであろう。ただ悶々と女そのものを恋うるだけである。

顔をそこに近づけて、埋めようとする。最後の夜、彼が邦にそうしたように。ずっと昔、スンガリー河畔で異国の男が女にそうしていたように。

近づけたいが、どちらにも近づけない。夢でのことではないから、当然のこととわかっている。それでも近づけようとする。死んだ温子の眸がじっと視ている。それでも近づけようとする。

なんと遠く隔って来たことか。妄想のなかでさえ何事もかなえられない。際限のない妄想を繰り返すだけである。

突然荒々しい声が響き渡って、俊介の妄想は中断した。初年兵たちに最も怖れられている小倉上等兵の声である。俊介が騒ぎの原因に気がつくまでに、僅かの間があった。僅かの間だが、怒声とビンタが吹き荒ぶには充分であった。

ビンタの嵐は、常識的には理由にもならぬことに理由を見出して、突如として吹き荒むのが常であった。他の社会ではとても想像も及ばない。同じ軍隊でも、駐屯地の条件によって、嵐の発生する頻度にはかなりの相異があった。ここは殺風景な曠野に閉鎖されている。血気旺んな男たちが満期除隊の目途もなく閉じ込められている。憂さの捨てどころもなかった。ビンタには、したがって、古兵たちの加虐趣味の娯楽の趣きがあったことは否めない。

殴られていたのは初年兵の渕上であった。理由はベチカのそばに置かれた俊介の汚れた編上靴である。

渕上は、伍代兵長の編上靴がひどく濡れていたから、乾かすつもりで持ち込んだ、と言った。

そんなしゃれた真似ができるほどお前は長いこと軍隊の飯を食っているのか、と、小倉は文句をつけてビンタを飛ばしたのである。

渕上は、伍代兵長が自分でしたとは言わなかったし、実のところ、小倉上等兵も渕上二等兵がやったなどとは思っていなかった。初年兵が生意気に伍代兵長の身代りになって、伍代の気に入ろうとつとめているように見えたことが癪に障ったのだ。

渕上は、早くも唇が切れ、鼻血を出していた。

俊介が起き直った。
「小倉上等兵、いいかげんにしないか。お前が威勢がいいってことは、見せなくたってわかってるよ、みんな」
小倉は猛々しい白眼を俊介に向けた。
「予備役さんは黙っていてもらいたいな」
「でかい口を叩くじゃないか」
俊介は毛布をはねのけて、床に下り立ち、上靴をつっかけた。
「兵隊、古いばかりが能じゃないがね、たかが関特演ぐらいであまり大きな顔をするなよ、みっともない」
俊介は、浜田兵長にいつか言おうと思っていたことを、浜田と同年兵の小倉上等兵に言うことになった。
「大きな顔がどうしたよ」
挑戦がはね返って来た。相手は古参の兵長を、予備役で他所者だから、なめている。面倒なことになりそうである。くだらない争いに厭気がさして俊介がひっこめば、俊介は駄目な古兵にされてしまう。俊介は意に介しないにしても、怯えた眼のなかに明らかに俊介の行動に期待の色を漂わせている初年兵たち、分けても俊介の行為の結果をかぶった渕上を絶望させることになる。
「俺の編上靴だ。俺が初年兵にやらせたんだ。文句があるか」
小倉は短く舌をのぞかせて、上唇を舐めた。気のきいた文句を探しているようであった。
その僅かの隙に、俊介は編上靴を拾って、渕上に渡した。
「すまんが手入れしてくれるか」

渕上はバネ仕掛のような返事と動作で出て行った。
「……小倉上等兵、もういいだろう。寝かせてくれ、俺は衛兵下番だ」
俊介は寝台に上った。
「覚えてやがれ」
小倉が唸った。
俊介の斬りつけるような視線が横に走って、小倉の白眼と衝突したが、どちらもそれ以上の行動には出なかった。

日夕点呼のとき、寝ている俊介は週番下士官に起こされた。
お前は御苦労だが、明朝、日朝点呼前に荷馬車を宰領して、駅まで慰問団を迎えに行け、というのである。駅といったところで、駅舎があるわけではない。ただ、国境の街へ通じている鉄道の途中で、汽車が停るだけのところである。湿地帯に近いこの兵舎からは約十五キロもある。往復三十キロ、したがって「御苦労」というわけである。
「こんなノロぐらいしか来てくれないところに、慰問団が来てくれるというんだ」
週番下士官がみんなに言った。
「明日、夕食後、慰問演芸会を行なう。美人の顔も拝めるらしいぞ」
男たちがウォーッと呻いた。

「伍代兵長、慰問団の名簿が事務室にある。明朝出発のときに取りに来い」
「諒解」
「それだけだ。寝てよし」
俊介は横になった。
週番下士官の伝達事項がはじまった。太平洋の戦局を簡単に解説している週番下士官の声が、俊介の耳を素通りした。どうせ虚報にきまっている。週番下士官が悪いのではない。日本人の大部分が虚報を信じているのだ。前にも、ガダルカナルからの「撤退」を、大本営は「転進」と発表した。海に浮んだ島で攻めまくられていて、何処へ方向を転じて進軍するのか。
勝手にしやがれ。今度ノモンハンみたいなことが起こったら、俺は勝手に「転進」するぞ。
明日は、久しぶりに、兵隊以外の人間の顔を見られる。
俊介は、遠くまで迎えに行くことを想像しながら、眠りのなかへ陥ち込んで行った。

## 2

出発前に慰問団の名簿を受け取ったときには、俊介は気にもとめなかった。女四名男三名と承知しただけであった。

途中で、荷馬車の馭者の一等兵と無駄話をしながら、名簿を取り出して見直しているうちに、俊介は唖のようになった。そこに斯波発子という名前を見出したのである。変った姓名だから、同姓同名の人違いということはあるまい。

最後に会ったのはいつだったか。記憶の歯車が忙しく回転した。

そう、あれは大連の繁華街でのことであった。ちょうど独ソ戦がはじまった日であった。二人は路上で出会って、あまり美味くもない珈琲を飲みながら話し合った。

何の話であったか。たぶん、独ソ戦は日本にとってのチャンスにはならない、というようなことであったろう。

斯波発子は、そのあとでこう言った。

「あたしたち再会するのがおそすぎたとお思いになる？」

「……連絡船ではじまった物語は、あの葉書で終ったとしますか」

俊介は斯波発子の眸に向って言った。

「これからどういうことになりますかね。卑怯なようだが、僕は自分の心がわかったためしはないんです」

男は、愚かにも、女がせっかく開こうとした出口を塞いでしまった。

「……二三日いる予定です。あの角のホテルに泊ります。気が向いたら、いつでもどうぞ……」

女は来なかった。俊介は電話をかけてみたが、女はいなかった。それっきりであった。

それが、今日、こんな地の涯のようなところで。

俊介は一等兵が何かきいたのに返事をしなかったらしい。

「……どうかしたんですか」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton